

# ホラーティウス『諷刺詩集』(1)

松 田 治 (訳)

## 凡 例

1. 訳文中の〔 〕は原文にない語句を訳者が補足したことを示す。
2. 訳文中の( )内の数字は原文のおよその行数を5行ごとに示したものである。
3. 注記で頻出する人名は繁雑を避けるため次のように略記する。

Ant.=Antonius, Cic.=Cicero, Enn.=Ennius, Epic.=Epicurus, Hor.=Horatius, Luc.=Lucilius, Lucr.=Lucretius, Maec.=Maecenas, Oct.=Octavianus (後の Aug.=Augustus), Porph.=Porphyrion, Verg.=Vergilius.

## 諷刺詩 1・1

稼ぎはほどほどに

マエケーナースさん<sup>1)</sup>、なぜ人は誰も彼も、自分の判断で選んだ人生もしくは偶然によってもたらされた運命に満足して生きようとせず、異なる道を歩む人々を称えるのでしょうか。

「ああ、商人たちは倖せだ」と長年の勤めで疲れた兵士が言う。苦労に苦労を重ねてその体はもうばらばらだ(5)。

これに対して、南風に叩かれる船の上で商人が言う、「兵役のほうがましだ。結局のところ、人間がぶつかり合い、わずか一刻のうちに素早い死か喜ばしい勝利が訪れるのだから。」

### Sat. 1・1

- 1) Maecenas. 昔エトルリアの一地方を治めていた王族の末裔。Hor.の後援者で、生涯にわたる恩人、そして友人。身边に詩人たちを集め、文学サロンを形成。当時の最も有力な政治家の一人で、Oct.をよく補佐した。この呼びかけは、この作品および諷刺詩集第一巻全体をMaec.に献呈するという詩人の意志表示であり、Maec.が最初から最後まで詩人の話し相手になるわけではない。

訴訟や法律の専門家は農夫を称える、雄鶏の時の声とともに顧客が彼の家の戸を叩く時分に(10)。

出廷命令が出て田舎から都へ連れ出された男は、都に生きる人々だけが倖せだと叫ぶ。

このようなことは他にもあり、そのうえ余りにも多いので、あのお喋りファビウス<sup>2)</sup>をくたくたにさせられるほどだ。

お手間は取らせません、私の言いたいことを聞いて下さい。ある神様が次のように言う、「さて、わしが(15)お前たちの好きなことをやらせて上げよう。これまで兵士だったお前は商人になれ。これまで法律家だったお前は百姓になれ。お前たちは役割を取り替えてそれぞれの場所から立ち去るがよい。おやおや、どうしてじっとしているのだ。」彼らは拒否するだろう。それでも彼らは幸福になる可能性がある。

一体どうして、立腹した——当然のことだが——ユーピテル<sup>3)</sup>が彼らに両の(20)頬を脹らませずにおこうか、また、今後は彼らの願いに耳を借すほど甘くはなれないと言わずにおこうか。

話を変えよう。私は、茶番劇作者と同じように仕舞いまで笑いながら話したくはない(とはいえ冗談まじりに真実を述べても不都合はないだろう。ちょうど、イロハを学ぶよう子供たち

2) 古注家 Porph. によれば、これはストア哲学に関する本を書いた Fabius Maximus Narbonensis のこと。

3) 15行目で「ある神様」(siquis deus)と記したものをここで Iuppiter と特定している。この一般から特殊へ変化する表現は Hor. がよく用いるもの。他に「大きな川」(55)が「アウフィドゥス川」(58)になるのも同じ例。神が頬を脹らませるのはパーレスク風の怒りの表現。

の同意を得るために(25)甘い先生たちがしばしば子供たちに菓子を与えるように)。ともかく、冗談は避けて真面目に問題を考えよう。

重たい地面を固い鋤で掘り返す者や、信頼できない宿屋の主や、兵士や、七つの海を大胆に駆け回る船乗りなどは、彼らが苦勞に耐えているのは(30)、いったん食糧の貯えさえできれば引退して安穩に老後を過すという目標があるからだと言う。

あたかも、小さな体で大仕事をしてのける蟻(これが彼らの手本になるので)が、できる物は何でも口にくわえて引っ張り、作りかけの山に付け加えるのと同じだ。蟻は未来を予知し、これに備えて用心する(35)。

だが蟻は、水瓶座が冬至の空を薄暗くすると同時にどこへも這い歩かず、賢明にもそれまでに探し集めた食糧を利用する。ところが君の場合、酷暑は君の稼ぎを阻止できない、冬も火も海も剣もしかりだ<sup>4)</sup>。何ものも君の邪魔はできない、君がいちばんの金持ちになるまでは(40)。

君は大量の銀や金を、ひそかに掘った地面に震えながら埋めて、一体何が楽しいのだ。「でも、いったん手をつければ、それは十円百円の端金に減ってしまうんだもの。」

だが、もし手をつけないとして、それでは積み上げた山にどんな美しさがあるのだ。

君の脱穀場で十万杓の麦を脱穀したとしても(45)、そのことで君の腹が僕の腹よりも余計脹らむことにはならない<sup>5)</sup>。

それは、たまたま君が、売られに行く奴隷た

ちにまじって、重たいパン入れ網をかついで運んだとしても、何も運ばない者より多くのものを君が受け取ることはないのと同じだ。

あるいは、ねえ君、自然の限界内で生きる者<sup>6)</sup>にとって、耕す土地が三千坪であれ三万坪であれ(50)、どんな違いがあろうか。「でも、大きな山から取り出すのは楽しいことさ。」君が我々に小さい山から同じだけのものを取り出させてくれるのだったら、どうして君は、我々の麦籠をさしおいて君の穀物倉を自慢する必要があるのだろうか<sup>7)</sup>。

それはあたかも、君が水差し一杯かコップ一杯の水しか必要なのに、「僕はこのちっぽけな泉から汲むよりは、大きな(55)川から同じだけの水を汲みたかった」と言うようなものだ。その結果、普通の尺度をはるかに上回る量の多さをよとする人々を、アウフィドゥス川の激流が岸边もろともに掠って運び去るのである<sup>8)</sup>。

ところが、最小限必要なものしか求めない人間は、泥土まみれの水を飲むことはないし、波に沈んで命を捨てることもない(60)。

だが、大抵の人々は偽り多い欲望にだまされて「これだけあれば十分という物はない、なにせ人の値打ちはどれだけ持っているかで決まるのだから<sup>9)</sup>」と言うが、こんな人間に対して君

6) 自然の欲求を充足させるだけで済ませる者という意味で、Epic. 派の考え。

7) 「同じだけのものを」(tantundem, 52)は「君が大きい山から取り出すのと同じ量を」の意。52-53行は原文がかなりコンパクトなため幾分判りにくい、おおむね次のように解せる。「君は大きい山を所有しこれを好んでいる。我々は小さな山しか持たず、しかもそれで十分だ。ところがこの貯えを消費する段になると、君が大きな山から取り出す量と、我々が小さな山から取り出す量は全く同じだ。肝心なのは、元々の量の多寡ではなく、その物をいかに使うかである。だから、わざわざ大きな山を持つ意味はない。まして大きな山を持っていることを自慢する理由は皆無だ。」

8) Aufidus はアプーリア (Apulia) 地方を貫流し、Hor. の故郷 Venusia や Cannae の近くを流れてアドリア海に注ぐ川。幼少期になじんだこの川の印象は終生詩人の脳裡を離れなかった (Carm. 3・30・10; 4・9・2)。

9) Luc. の文章を使ったようである。'aurum atque ambitio specimen virtutis virique est: tantum habebas, tantum ipse sis tantique habearis.'「黄金と選挙運動は勇氣と男らしさの徴である。君は所有する黄金と同等の存在であり、所有する黄金と同等に評価される」(Warmington, frg. 1194-5)。

4) Kiessling-Heinze はここに列挙された試練の最後の三つ(火、海、剣)をコンマなしに並べて接続詞省略表現であるとし、しかもこの三つはもはや「阻止する」(demoveat)の主格に非ず、次行(40)の「邪魔する」(obstet)の主格だとしている。その理由として、夏の暑さと冬の酷寒は人間に襲いかかり、火以下は人間の邪魔をするからであるという。確かに「襲う」と「邪魔する」では意味が違うが、ここではこの相異を問題にしないでなくてはならない要因はなく、むしろこの読み方は文章の流れに逆らうように思える。

5) ここは Luc. の文章を模したらしいことが指摘されている。'milia ducentum frumenti tollis medimnum vini mille cadum……aeque fruniscor ego ac tu.'「君は七二〇万リットルの穀物と一千壺の葡萄酒を取り去る。……僕は君と同じ程度に楽しむことができるのだ」(Warmington, frg. 581-3)。

は何ができれば。こういう連中は惨めなままに放っておけばよい、自分でそうなりたがってるのだから。たとえば、金持ちでいながらけちん坊なあるアテーナイの男は、いつも人々の非難を次のような言葉で一蹴していた(65)と伝えられている。「やつらは口笛で俺を野次るが、俺は、家で金庫の中の金を拝むとたちまち、よしよし、よくやったという気分になる。」<sup>10)</sup>

喉の渴いたタンタロス<sup>11)</sup>は水を飲もうとして唇を突き出すが、水は波を打って逃げる。なぜ君は笑うのだ。名前を変えればこれは君の話じゃないか。

方々から集めた金のつまった袋の上で(70)君は口を開けて眠るが<sup>12)</sup>、しかし君はそれをまるっきり神器扱いして決して触らぬよう、あるいは、まるで絵に対するかのように眺めて楽しむよう、みずから戒めている。

君は金がどんな力を発揮するか、どう利用できるかご存じないらしい。これでパンが買えるし、野菜、半リットルの葡萄酒も買える、さらには、もし不足すれば我々人間の本性が苦しむようなものだって買えるのだ<sup>13)</sup>(75)。

あるいはまた、恐怖の余り死ぬほどの思いで見張りをする、夜昼を分かつたずあくどい盗人たち、火事、君の家を荒して逃走する奴隷たちのことを考えてやきもきする、こんなことが楽しいのか。そのような財産なら私はむしろ何も持たずいつも貧乏でいたい。

しかし<sup>14)</sup>、もし君の体が悪寒に襲われて苦し

んだり(80)、または別の病気で君が床につく場合、君には、君の枕辺に座り、薬を調え、君を快復させて子供たちや愛する者たちの手に君を返すよう医者頼んでくれる人がいるかい。

君の奥さんは君の快復を望まない、君の息子もそうだ。誰もが君を憎んでいる。隣り近所の人々や知り合いや少年少女たちが(85)。

すべてに金を優先させる君は驚くだろうか、もし誰も君に愛情——これに対して君の方では何のお返しもしないが——を示さないとすれば。

あるいは、君に一銭も使わせずに自然が与えてくれる親戚の人々を、もし君が引きとどめたい、いつまでも仲間にしておきたいと望んだとして、君は運悪くたびれ儲けをしたと思うだろうか<sup>15)</sup>、あたかも、馬窓に従順な(90)驢馬にカンプス・マルティウスで走ることを仕込もうとする人と同様に。

要するに蓄財には限度を設けるべきだ。これまで以上に所有したときは、君は貧乏ノイローゼをへらし、労苦に終止符を打つ準備をすべきだ、欲しかったものを手に入れたのだから。

ウンミディウス某の轍を踏んじゃいけない。これは手短かに話せる。金を(95)枡で量るほどの分限者でいながら、その吝嗇ぶりといえど、自分の奴隷よりましな服を着たことは一度もなく、死を迎える今はの際まで食糧不足のために

質問とする解釈と、想像上の対話者の質問と解釈する二説がある。我々は Hor. の質問と解釈したい。ここを対話者の質問と考えるのは Palmer, Plessis-Lejay, Morris らで、Hor. のものとするのは Kiessling-Heinze, Villeneuve (Notice, pp. 18-19), Perret (Horace, p. 80) ら。

80-83 行を再読してみよう。Morris は、ここは、Hor. の話し相手が彼に金の有効な使い道を説いている文章だと言うが、果たしてそうだろうか。確かに 76-79 行で Hor. は余計に財産があれば心配がかさむだけだ、とその害を説いている。そして問題の場所に移るのだが、これは、Hor. のこの言葉を聞いた相手が「金は害をもたらすだけではない。益もある。たとえば病臥したとき、金があれば医者と呼ばれる薬も買える」と反論しているのだろうか。そうではないらしい。ここは Hor. が質問の形で倫理を説いているのである。つまり、いくら金を貯えていても、ケチの余り普段から正しい(ということとは世間並の、常識的な)金の使い方をしていないと、いざというとき(たとえば病気になったとき)妻子にまで背を向けられてしまう、ということを述べているのである。

10) このアテーナイ人のエピソードを Hor. がどこから取り入れたのか不明。

11) Tantalos の罰のもう一つのイメージは、今にも頭上に落下しそうな岩石を見て恐怖におののくというもの (Euripides, *Orestes*, 5fg; Lucr., *De rerum natura*, 3・980-1)。この記述は Homeros の伝統 (*Od.*, 11・582fg.) に従っている。

12) 「口を開けて眠る」(indormis inhians, 71) という句は欲望、渴望の表現として使われたらしい。

13) 74 行の品物(野菜、パン、葡萄酒)から推してここでも詩人は日常生活に必須な事物を念頭に置いてこのように記したらしいが、具体的に何を指すのか判らない。ちなみに Orelli は 'vestes, balneum, usus mulieris' と注釈している。

14) 「しかし」(at) で始まるこの一節は原文では 80-83 行の部分である。この部分については、これを Hor. の

倒れやしまいかと自分で心配するほどのものだった。だがこの男を奴隷身分から解かれた女が斧でまっぴたつに切り裂いた、テュンダレオース一族中で最強の女が<sup>16)</sup>(100)。

「それじゃ君は何を僕に勧めたいのだ。ナエウィウス流に、またはノーメンターヌス流に生きよと言うつもりか。<sup>17)</sup>」

君は今度は極端に矛盾する事柄を並べている。私は君に食欲を戒めているのであって、碌でなしや阿呆になるよう勧めているわけじゃない。タナイスとウィセッリウスの義父<sup>18)</sup>との間には何かしら違いがある(105)。

何事につけ程の良さというものがある。つまり、一定の限度があって、その向こうにもこちら側にも善は存在しえないのだ。

出発点に話を戻そう。くり返すと、人は食欲ゆえに自分の現状をよしとせず、むしろ別の道を歩む人々を称える、隣人の山羊の乳房が自分のよりいっそう脹らんでいるからといって

(110) ねたみ苦しむ、そして自分を世の大多数を占める貧しい人々と比較しないで、先ずこの人を、次はあの人を凌ごうと苦勞する、そういう人々のあり方である。

このように先へ先へと急ぐ者の前には、いつも、もっと裕福な人が立ちふさがるものだ。ちょうど、出走枠から放たれた戦車<sup>19)</sup>を馬の蹄が引っ張っていくとき、御者が、自分の車を抜いていった馬どもに追い迫り(115)、自分が抜き去って今やどんじりにいる他の御者を侮る、というのに似ている。

こういう理由によるのだ、素晴らしい人生を送ったと確言し、そして死を迎えて、ちょうど満腹した会食者のように満足しきってこの世におさらばする<sup>20)</sup>、というふうな人が滅多に見出せないのは。

しかしもう十分だ。君にあの目病みのクリスピーヌスの本箱<sup>21)</sup>を(120)荒したなどと思われては困るので、これ以上一言も付け加えるまい(121)。

## 諷刺詩 1・2

### 盗淫の戒め

笛吹き女の組合、にせ薬売りや乞食坊主たち、パントマイムの女役者たち、道化師たち、こういう連中が一人残らず歌手ティゲッリウス<sup>1)</sup>の死を深く悲しんでいる。彼は気前のよい人間だったからだ。

逆に、浪費家と言われるのを恐れて、貧しい

15) ここは、君は「親戚の人々を引きとどめたい、いつまでも仲間にしておきたいと望んだ」にもかかわらず、彼らは君の気持ちに反して君の仲間にならなかった、君は失敗したのだ、という状況を補足しなくてはならない。これは当然の失敗なのに、君はそれを「運悪く(たまたま)くたびれ儲けをしたにすぎない」と考えるのだという Hor. の皮肉。競争馬用の馬銜を驢馬につけてやっても、これを戦車につないで走らせるなど土台無理な話で、これこそ「くたびれ儲け」の例だが、「これと同様に君はくたびれ儲けをしたと思うか」との問いである。

16) ウンミディウス某(Ummidius quidam, 95)はここに述べられていること以外は不明の人物。この女(liberta)は、Umm. の奴隷だったが、年季が明けてこの主人によって自由にされた。この元奴隷が、文脈によれば主人の余りのケチぶりを恨んで、これを斧で殺害した。この行為の殺伐さ、および兇器の共通性から、Hor. はこれをテュンダレオスの娘クリュタイムネストラになぞらえている。この女性は、トロヤ戦争から帰還した夫アガメムノーンを謀略によって無き者にした。そのとき斧を使ったとされる。この一節の最後の表現は、あたかもこの王妃と元奴隷が同一人物だったかのようになっているが、これは勿論「……一族中で最強の女がやったように」とのこと。

17) Naevius も Nomentanus も金にだらしない、物凄く浪費家の例。

18) Tanais や Visellius の義父といった人物をめぐる実際にどんな出来事があったのか不明。いずれにしろこの二人は、両極端の代表、つまり一方は食欲の代表、他方は浪費専門の碌でなしの代表として名が出されたのであろう。

19) 古代ローマ人がこよなく愛好した戦車競走の場面。これは二頭立てないし四頭立ての戦車で行なわれた。「出走枠」と訳した carcer (carceribus, 114) は跳ね上げ戸式のもの。

20) Lucr. の文章を使ったらしい。‘cur non ut plenus vitae conviva recedis (……?)’「なぜ満腹した会食者の如く人生から離れないのか」(De rerum natura, 3・938)。

21) クリスピーヌス(Crispinus)というのは、Porph. によれば Plotius Crispinus のことで、ストア派の哲学者(Sat. 1・3・139; 2・7・45)、詩人(Sat. 1・4・14)。大変な饒舌家だったという。

Sat. 1・2

1) Tigellius. サルディニア出身の音楽家で、Cic. の時代に活躍した。Sat. 1・3 の注1を見られたい。

友に寒さや(5)辛い飢えを凌ぐための物を恵もうとしない人がいる。

また別の人に次のように尋ねてみなさい、なぜ、父祖伝来の豊かな財産を貪欲な胃袋に注ぎ込む、借金までしてあらゆる美味佳肴を買い漁る、という愚行に走るのかと。その男はケチな肝の小さい人間と見られたくないからだ(10)答える。これをほめる声、けなす声まちまちだ。

フーフィディウス<sup>2)</sup>はつまらぬ男、無価値な奴との評判を恐れているが、彼は田畑も多く、高利で金を貸す大金持ちである。月に五分の利息を元金から天引きし、そして各人の苦境が甚だしければ、それだけいっそう厳しく取り立てる(15)。彼は口うるさい父親のもとで〔見習い修業のため〕成人服を着たばかりの少年たちを将来の借り手として探し回る。

私のこの言葉を聞くと同時に、「これは驚いたことを言う。あの人は、自分のためには利益に見合う出費をしているさ」と誰もが叫ぶだろう。この男が？ 彼がどんなに自分自身に厳しいか殆ど信じがたいほどで、なにしろあの父親、つまり(20)テレンティウス<sup>3)</sup>の喜劇の中で、息子を勘当したばかりに惨めな生活をする様が描かれているあの父親さえ、このフーフィディウスに比べればその苦しみようは少ないのだ。

もし今誰かが「何を狙ってそんなことを言うのだ」と尋ねるなら、答えはこうだ。「人々は愚かにもある過ちを避けようとして、逆の過ちに陥る。」

マルティヌスは寛衣<sup>トガ</sup>を引きずって歩き回る。かと思えば、寛衣を(25)優雅にも腿の付根までたくし上げて着る者もいる。ルーフィッルスは芳香錠剤を匂わせ、ガルゴーニウスは山羊くさい<sup>4)</sup>。中間というものがない。

ある男たちは、衣服の裾に縁飾りを縫いつけてこれで踵を包んでいる女<sup>5)</sup>以外には目もくれない。逆に、悪臭の漂う淫売宿で待っている遊女でなければ、という男もいる(30)。

ある名高い男が淫売宿から出て来たとき、「やあ、よくやったじゃないか」と神的な判断に基づいてカトー<sup>6)</sup>は言った。「全くのところ、烈しい欲望が血管を膨脹させると同時に若者はここへ来るべきであって、人妻たちに近寄ってはならないのだから。」「私なら、こんなおほめにあずかるのは(35)御免だ」と言うのは、白服を着た女性を好むクピエンニウスである。

間男たちの戦果を喜ばない方々はよくお聞きなさい、損はしません。彼らは至る所で難儀し、そして快樂——これは仲々得がたく、数々の苦痛で台無しにされる——そのものによってしばしばひどく危ない目に会う、ということだ(40)。

ある者は屋根から身を投げ、ある者は死ぬまで鞭打たれ、ある者は逃げる途中恐ろしい盗賊団に捕えられ、ある者は刑罰を購うのに金を使い、ある者は馬丁たちに辱められた。いや、それどころか、ある人が〔不屈き者の〕辜丸と陰茎を刀で切り落とすという(45)事件もあった。誰もが「これは法的に正しい」と言うが、ガルバ<sup>7)</sup>だけはそうではないと言う。

だが商品は第二の階級——つまり女解放奴隷たち——の場合、どれほど安全だか知れやしない。この女たちにサルスティウス<sup>8)</sup>は血道を上げる。その烈しさは間男たちのそれに勝るとも劣りはしない。しかしもし彼が財産や理性の許す範囲で、また慎ましいながらも(50)気前よく振舞える程度に善良かつ寛大であることを望むなら、彼は、恥にも破産にもつながらない、必要な金額だけを与えるはずだ。

だが実際は、このサルスティウスという男

2) Fufidius. 当時の名高い高利貸だったということ以外は不明。

3) Terentius (ca. 195-159) はローマの代表的な喜劇作家の一人。この劇は *Heautontimorumenos* (「自虐の人」) で、父親は息子が帰ってくるまであらゆる楽しみを断つ。

4) Rufillus, Gargonius. いずれも *Sat.* 1・4 の注 15 を見られたい。

5) 既婚婦人のこと。

6) M. Porcius Cato, いわゆる大カトー (234-149) のこと。 *De agri cultura* (「農事論」) などを著し、政治家としては監察官を務めた。

7) Galba. 実在した法律家と推測される。

8) Sallustius. 同名の歴史家 (86-35) のことではなく、誰をさすのか不明。

は、「俺は決して主婦には手を出さないよ」ということ、このことだけを拠り所に自己満足し、自画自讃する。これは、かつて、オリゴ嬢のあの隠れもない愛人マルサエウスが(55)、このマイムの踊り子に父祖伝来の土地や家を与えて、「人妻とは絶対に関係したくない」とうそぶいたのと同じだ<sup>9)</sup>。

だが問題はマイムの踊り子や娼婦たちであるから、評判の方が財産よりいっそう下落する。あるいは君は、どう転んでも害をもたらす例の事柄ではなく、間男の役割さえ(60)避ければそれで十分だと言うのかい。

すっかり評判を落とす、父の財産を蕩尽する、これはいずれにしろ悪いことだ。君の間違いの相手が主婦であれ、トガを着た女中であれ、そこに何の違いがあろう。

ウィルリウスはファウスタによってスッラの婿殿となった<sup>10)</sup>。気の毒に彼はこの肩書だけで騙され、その罰を受けた、それも(65)必要以上の罰を。拳でなぐられ、剣で傷つけられ、外に放り出された。その間、中にはロンガーレーヌスがいた。こんな嫌な目に会った後に、もしも彼の魂がペニスに口をきかせて彼にこう言ったとしよう、「どうしようてんです？ 一体私めがあなたに、偉大な執政官の娘の陰部を、ガウンに包まれた(70)陰部を要求してるとでも言うんですか、私が煮えたぎっている今このときに。」答えはどうなっただろうか。「その女は偉大な人物の娘なんだよ。」

しかし、自らの資源を豊富に持つ自然<sup>11)</sup>の勧めはどれほど立派で、また、どれほど君の言葉と対立しているか知れやしない、もし君が正しく自然に対処し、そして避けるべきものと求むべきものとを(75)混同しないよう心掛けさえす

れば。

君は、自身の欠点で苦勞するのも事物の欠点で苦勞するのも違いはないと思ってるのか。そういうわけだから、後悔しないように、主婦を追いかけるのは止しなさい。そこには、実際に収穫できる利益よりは、難儀、苦痛の方が多い。

こういう女性は、雪白の真珠やエメラルド(ケリントゥス君、こういうところは(80)君の領分だ)に包まれても、それだけ柔らかい尻を、スラッとした脚を持ってるわけではない。それどころか、しばしばトガを着た女たちの方がましである。それにトガを着た女は自分の商品を装飾しない。売り物をはっきり見せる。そして、何か美しい物があってもそれを見せびらかしはしない、とはいえ醜い部分は隠そうとするけれど(85)。

王たちは習慣として、馬を買うとき、馬体を包み隠したままで検査する。これは、よくあることだが、美しい外貌が弱い脚を支えにしているような場合、ポカンと口を開けた買い手が美しい尻、小さな頭、長い首に騙されないようにするためである。

彼らのやり方は正当だ。だから君は、女体の欠点については(90)ヒュプサエア同様にまるで盲目なくせして、女体美をリュンケウスの鋭い目で見てはなるまい。<sup>12)</sup>「ああ、この脚、この腕！」実際はこの女性のヒップは小さいし、鼻は大きく、上体は寸足らずで、足は大根なのに。

さて主婦の場合、我々は顔以外には何も判らない。名前がカティアであることを除いて、全て地面に届く衣服で隠している(95)。もし君が禁断の果実、塹壕で囲まれたもの(というのは、この困難こそが君を狂わせるのだから)を求めらるなら、君の前には数々の障害があろう。見張りの者たち、美容師、居候の女たち、踵まで届く長衣、その上に打ちかけた外套、対象が純粹な形で君の目に入るのを妨げる多くの事物である(100)。

9) Origo は Cic. の時代の踊り子 (mima) だったらしい。Marsaeus は不明。

10) Cic. の時代のスキャンダル。スッラ (Lucius Cornelius Sulla, 138-78) は内乱期の代表的な政治家の一人。その娘 Fausta は Milo の妻だったが、愛人が多かった。Villius も Longarenus もその一員で、「スッラの婿殿」というのは皮肉。情事の真相はもはや判らないが、恐らく当初 Villius はスッラの婿になる可能性を考えていた(「肩書だけで騙され」)のかも知れない。

11) Epic. 派の理論。

12) Hypsaea は不明の人物。Lynceus はアルゴナウタイの一員で、視力の強いことで有名。

もう一方は邪魔する物がない。コース島の織物<sup>13)</sup>のおかげで君は裸同然の女性を眺めることができる。不細工な脚、汚ない足をしてないかと心配する必要はない。彼女の上体を自分の目で測れる。あるいは君は、商品を見せられる前に、不意打ちを喰らい、金を奪われる方が好みかな？

ある人は「雪山に分け入って兎を追う(105)狩人が、目の前に置かれた兎には手を触れようともしない」と語り、そして付け加える、「私の愛はこの狩人に似ている。なぜなら彼は手近にある物は無視し、逃げる物を捕えるのだから<sup>14)</sup>。」こんな小さな詩で君は自分の心から苦痛や、悩みや重たい心配ごとを追いかけていくのか(110)。

自然が人間の欲望にどんな限界を設けたか、自然は何を持っているか、何を拒まれたら苦しむか、ということを探求し、そして、実質から空虚を峻別する方が有益ではないのか。

渇きが君の喉を焼くとき、君は黄金の盃を求めるか。空腹でたまらないときに君は、孔雀と(115)カレイ以外の全ての料理を軽蔑するか。そして君の男根が膨らんだとき、直ちに屈服させられる女中か召使いの少年が手近にいても、君は破裂するまでに突っ迫している方がよいのか。私は御免だ。私はすぐ手に入る安直な恋愛がよろしい。

ピロデーモスは、「あとでね」、「もっとお金を頂戴」、「主人が出かけたらね」(120)と言う女はガッリーたちにふさわしく、彼自身は、高い金がかからず、命じられたらすぐ来る女が好ましいと言っている<sup>15)</sup>。

その女は顔色がよく、美しく、化粧していてもよい、がしかし自然の恵み以上に丈が高くなったり、白く見えたりしてはならない。彼女が私の右腹の下にその左腹を寄せれば(125)、彼

女はイーリアであり、エゲリアなのだ<sup>16)</sup>。私は彼女に好きな名をつける。

かくして、私が女性と交わっている間、御亭主が田舎から戻り、戸が蹴破られ、犬が吠え、家全体がゆさぶられて大音響を立て、真青になって妻女がベッドから飛び下り、女中は女中で自分は不幸者と叫ぶ、こういうことを私は心配する必要がない(130)。女中は脚を、抑えられた女房は持参金を、私はわが身のことを心配するといったことはない。寛衣を引っかぶって裸足のまま逃げ出さねばならない、金が、もしくは尻が、いずれにしろ評判が台無しになってはいけないので。現場を抑えられるのは実に惨めだ。この点では、たといファビウスが裁判官であっても、私の勝ちだろう<sup>17)</sup>(134)。

### 諷刺詩 1・3

#### 寛容の勧め

これはどんな歌手にも共通の欠点だが、彼らは親しい人々に歌を所望されても決して歌おうとしないことがあり、逆に頼まれもしないのにいつまでも歌いやめないことがある。

あのサルディニア人ティゲッリウス<sup>1)</sup>にもこの欠点があった。無理のきいたカエサル<sup>2)</sup>が仮

16) Ilia はロームルスの母、Egeria はローマの第二代王ヌマ・ポンピリウスが相談相手にしていたとの伝説のあるニンフ。こんな由緒ある名前を使うのは、その相手が最高級の女性だということであろう。

17) Fabius. 恐らく Sat. 1・1・14 で言及されたのと同じストア派の人物。「賢人(ストア派)は決して苦しまないけれど、不義密通の現場を抑えられるのは、この賢人にとってさえも、超克しがたい、惨めなことである」という意味であろう。

#### Sat. 1・3

1) Tigellius. Cic. の時代の高名な音楽家で、カエサルやクレオパトラ、さらに Oct. らの知遇を受けていた。サルディニア島出身なので 'Sardus' と呼ばれたが、本名は Hermogenes Tigellius. Sat. 1・2・1—3 を見ると、この歌手は Hor. がこの作品集を編む頃には既に物故していたことが判る。

この作品の 129 行で Hermogenes という人物が言及されるが、これは上述のサルディニア人の解放奴隷が親戚だったらしく、全く同名(Herm. Tig.)でしかも同じ歌手だった。これは詩人の同世代人で当時まだ活躍していた。

2) このカエサルは Oct. のこと。まだ Aug. の称号はなかった。「彼の父」というのが Iulius Caesar である。

13) コース島原産の透明な絹布。

14) 恋人と狩人の比較はギリシャの詩人カリマコス(前三世紀)のエピグラムに手本がある。

15) Philodemus は Cic. 時代の有名な Epic. 派哲学者。ここで Hor. はこの哲学者の詩を要約、引用している。Galli はキューベレー女神の祭司たちで、去勢する習慣があった。

に彼の父および彼自身との友誼をたてに要求しても、何も(5)得られなかっただろう。その気になれば彼はオードヴルからデザートに至るまでの間「イオー・バックエ<sup>3)</sup>」と叫び続けられるのだ、四絃琴の最高音に合わせたり、最低音に合わせたりして。

この男は気紛れそのものだった。しばしば、まるで敵から逃げるかのように走ったし、またしばしば女神ユーノーの(10)祭具を運んでいるように見えることもあった。

奴隷の数は二百人のときもあれば、十人ということもしょっちゅうだった。王たちや地方領主など万事大きなことしか話題にしないかと思えば、「私には三脚食卓と、混ぜ物のない塩を入れる貝殻<sup>4)</sup>と、どんなに粗末でも寒さを防げる服があればそれでよい」と言うときもある。

誰かが百万円の金を(15)僅かな物で満足するこの締め屋に与えても、五日もたてばその財布は空っぽになっただろう。

夜どおし朝まで起きていることもあれば、昼日中ずっと鼾をかくこともあった。これほど定まりのない人間はいなかった。

ここで誰かが言うだろう、「君はどう、君に欠点はないの」と。ありますとも。でもそれは別種の、たぶんもっと小さな欠点だ(20)。

マエニウスがその場にいないノウィウス<sup>5)</sup>を非難したとき、「おいおい君」とある人が言った、「君は自分のことを知らないのかい、それとも僕らに知られてない振りをして僕らを担ぐつもりかい。」これに対してマエニウスは「自分のことなら僕は許せるのさ」と応じた。この独りよがりな愚かで、よこしまで、批判すべきものである。

君は自分の欠点は目薬をつけたろくに見えない目で検査するのに(25)、友人たちの欠点とな

ると、なぜ、驚やエピダウロスの蛇<sup>6)</sup>のように鋭い目付きで見るのだろうか。だが、その代り、彼らの方でも君の欠点を探すということになる。

ある男<sup>7)</sup>は少々怒りっぽく、今どきの鼻のどがった人たちとはうまく合わず、田舎風に髪を刈り(30)、服をずるずる引きずり、足に合わないぶかぶかの靴は今にも抜けそうで、人々の笑いぐさになる。にもかかわらず彼は善い人物である。それどころか彼以上の善人はいないほどだ。

また彼は君の友人であり、そのもっさりした体には偉大な才能がひそんでいる。それから君自身をさらによく検査したまえ、果たしてとっくの昔に何らかの欠点が(35)生まれつき、または悪習によって植えつけられてないかどうか。というのは、畑を放っておくと、そこに羊歯が生じ、これを燃さねばならないからだ。

むしろ我々は次の事実に目を向けたい。恋人のおぞましい欠点が恋にめしいた男を欺くこと、あるいは、ハグナのポリープがバルビーヌス<sup>8)</sup>を喜ばせるように、このような欠点そのものが恋する男を喜ばせるということである(40)。

望ましいのは、我々が友情の場でこのような過ちを犯すことであり、そしてそんな過ちが徳という立派な名称で呼ばれること、である。

だが少なくとも父が子供の欠点を嫌がらないのと同様に、我々も友人に欠点があってもこれにむかついてはならない。

やぶ睨みの子を父親は可愛い目ちゃんと呼び、

6) 「エピダウロスの蛇」(serpens Epidaurius). エピダウロスはペロポネネーソス半島北東部の町。古代の壮大な半円形劇場が完全に近い形で現存する。医神アスクレーピオスはいわばこの町の聖者で、ここに神殿を持ち、神殿では彼の象徴たる蛇が崇められた。従ってエピダウロスの蛇は聖なる蛇であり、通常のものとは区別されていた。

7) ここ(29)から「……偉大な才能がひそんでいる」(34)にかけて語られている人物が誰なのか確定できないが、当時の文学仲間の一人 Verg. のことかも知れないとの説もある。「鼻のどがった人たち」(acutis naribus) は人のあらを見てすぐ笑いたがる都会人のこと。

8) Hagna は女解放奴隷によく使われた名。Balbinus は不明。

3) 「イオー・バックエ」(Io Bacchae). 酒神讃歌(ディテュランボス)の最初の文句。

4) 塩を入れる器として貝殻の対極にある贅沢品は銀製のもの。金持ちや食通らは塩に香料を加えた。

5) Maenius, Novius. 脚韻さえ整えばどんな人物名でも構わないところ。



かつて月足らずで生まれた(45)シーシュポス<sup>9)</sup>のように子供がひどく小さければ、これをヒョコちゃんと呼ぶ。足がねじれていればこれを鰐足ちゃんと呼び、踵が変形してうまく立てない子を蟹足ちゃんと呼ぶ。

けちけち暮らしている男、これを儉約家と呼ぶのもよからう。ばかで、いささか己惚れの強い男がいるとしよう。この男は仲間うちでは(50)親切者でとおることを切望しているのだ。

他方、いくぶん粗野で、そして必要以上に率直な人間もいる。これは裏表のない、勇敢な人と見なせばよい。かっとなりやすい人がいる。これは情熱家の一人に数えられよう。思うに、このような寛大さが友情を結ばせ、長続きさせるのだ。

ところが実際は我々は美質をあべこべに解釈し、そして(55)きれいな壺を汚そうとする。

我々の知り合いに一人の誠実な人物がいて、これがとても謙虚な男であるとしよう。彼を我我は、のろまとか間抜けなどと呼んでしまう。

別の男はありとあらゆる罟を逃がれ、悪人に脇腹を晒したりすることはないが、それは、彼が激しい嫉妬と中傷のうずまく(60)こんな世の中で生きているからに他ならない。この良識にみちた慎重な人間を、我々は偽善者だの目から鼻へ抜ける奴だのと呼ぶ。

ある男がいくぶん気ままな質で(私がしばしば気紛れに、マエケーナースさん、あなたにお見せする私の姿と同じなのですが)、そのお喋りでもって他人の読書や考えごとを妨げたとする。我々は「迷惑な奴だ(65)、まるで礼儀を知らない」と言う。やれやれ、何といい加減に我我は自分の首を締める法を作ることだろう。

というのも、欠点のない人間など生まれっこないし、最良の人間というのは最も軽い欠点に悩む人のことだ。

これは正当なことであるが、私の寛大な友人は私の欠点に対して美点を秤にかけてみるべきだ。そして美点の方が多い(70)ときは(実際に

そうでありさえすれば)、彼は秤皿を美点の方へ傾けねばならない、私に好かれたければ。この条件で彼も同じ天秤で計られるだろう。

自分の瘤で友人に不快感を与えたくないと思う人は、友人のいばを大目に見るはずだ。自分の欠点について寛大さを求める者が、自分の方からそうしてやるのは当然のことである(75)。

それから、怒りという欠点や、愚かな人々<sup>10)</sup>に固有のその他の欠点も同じく完全には排除できないのだから、なぜ理性はみずからの分銅や秤を用いないのか、そして、なぜそれぞれの事例に合った罰によって欠点を正そうとしないのか。

料理皿を取り下げるよう命じられて、食べかけの(80)魚やまだ暖かいソースをなめた奴隷を、もしある人が十字架にかけたとしたら、この人物は良識ある人々の間ではラベオー以上の狂人<sup>11)</sup>でとおるだろう。

これに比べて次の例はどれだけ気違いじみており、また罪深いことだろう。君の友人が些細な間違い——もし君がそれを許さないなら、君の方が嫌な奴と思われる程度の——を犯した。君は(85)猛烈に彼を憎み、避ける、あたかも借金した男がルーソー<sup>12)</sup>を避けるように。この借金した男は、不幸にも嫌な朔日がやって来たとき、もしもどこからか利子または元金を探し出さない限り、囚人のように首筋を伸ばして「ルーソーの語る」陰気な歴史話を聞かされること

10) 「愚かな人々」(stultis, 77)。これはストア派の用語を借りたもので、この借用は「全ての過ちは平等である」とのストア理論に対する攻撃がここから始まることを示す。そしてこの論難は最後まで続けられる。

11) Labeo. このテキストに関連して親子二人の Labeo が知られているが、どちらを指すのか不明。父は Caesar 暗殺首謀者の一人であるがピリッピイの戦場で自決。子の方は後に法律家として名を成したが、この作品が書かれていた頃はまだ 16~20 歳の青年。

12) Ruso. 古注家 Porph. は Cn. Octavius Ruso の名を記しているが、どういう人物か不明。Hor. がここに述べるように、金貸しでありながら柄にもなく歴史を書いたり話したりするのが好き、ということ以外は知られていない。債務者は、どうしても返済できないときは、死ぬほど退屈な歴史話を聞く代りに返済条件を緩めてもらった。「朔日」(Kalendae)は高利貸しが貸し金を取り集める日と決まっていた。

9) Sisyphus は三頭宮 Ant. が養っていた侏儒の名。

になるのだ。

酒に酔った友人が食食用寝台に小便をし、あるいは、エウアンドロスの(90)使いふるした小皿<sup>13)</sup>を机から投げ落とした。そのために、あるいはまた、この友人が以前、大皿に盛った若鶏の肉の私のぶんを食べたくて横取りしたために、彼は私にとってそれだけ余計うとましい存在となるだろうか。もしこの男が盗みを働いたり、あるいは信頼を裏切ったり、約束を破ったりしたら、私は一体どうしたらよいだろうか(95)。

過ちはすべて、大体同じであるとする人々<sup>14)</sup>は、現実と直面するときひどく苦勞する。これには常識と生活習慣が抵抗するし、また、正義と公平の母とも言うべき利益そのものもさからう。

動物どもが<sup>15)</sup>、まだ言葉を知らない、きたない群をなして原始の地面から這い出てきたとき、彼らは樗の実やねぐらを求めて(100)爪や拳で、次に棍棒で、そしてこうのように徐々に進んでやがて経験によって発明された武器でもって戦い、最後に彼らは、叫び声や考えごとに意味を与えるための動詞と名詞を見出した。それからというもの、彼らは戦争を止め、町を建設し、そして法律を制定しはじめた(105)。盗賊や追

剥ぎや姦通者にならないよう戒めるために。

というのは、ヘレネー以前にも女陰が戦争の不吉な原因になったことがあるからだ<sup>16)</sup>。しかしその頃の男たちは無名のまま死んでいった。彼らが束の間の交接を獣のように貪っていると、群の中の牡牛がするように、力にまさる人間が殪したのだ(110)。

不正への恐れによって法律が発明されたことを君は認めねばなるまい、もし君がこの世界の歴史を緋いてみるならば。

また自然本能は、快いものとそうでないもの、避けるべきものと求めるべきものは区別できるが、正と不正の区別はできない。

そして論理<sup>17)</sup>は、他人の畑のまだ柔らかい(115)キャベツをもぎ取る人と、夜陰に乗じて神々の聖物を奪う人が同罪を犯している、ということを決して立証できまい。

それぞれの過ちを適切に罰するための規準があつてしかるべきだ。

そして、皮紐で打てば済む人を、恐ろしい革鞭で追いかけてはならない。というのは、君が蘭草の鞭で、もっと大きな罰にふさわしい者を(120)叩くこと、これを私は心配する必要がないから<sup>18)</sup>。なぜかって？ 君は窃盗と追剥ぎは同じことだと言ってるじゃないか。またもし人人が君に王国を委ねたならば、罪の大小の区別なしに同じ鎌で刈るつもりだと脅しているじゃないか。

しかし、もしも賢者だけが富者であり<sup>19)</sup>、立

13) 「エウアンドロスの使い古した小皿」は「極めて古い小皿」のことであろう。エウアンドロスは神話伝説上の人物で、アルカディアを統治したあと、後にローマとなる地域へ移住し、バランティオン(後のパラティウム)という町を建設した。Hor. 時代のローマ人にとってもこの人名は既に太古の響きがあった。他方、この小皿は、文脈では鑑賞用の骨董品というよりむしろ実用的食器であり、また現在生きている友人と私(Hor.)に関わることでもあるので、この表現に関連して特に骨董の鑑定人を詩人がひやかしているとは解する必要はない。

14) ストア派のこと。Cic. の次の文章はこの理論を的確に伝えている。'Omnia peccata esse paria, omne delictum esse scelus nefarium, nec minus delinquere eum qui gallum gallinaceum, cum opus non fuerit, quam eum qui patrem suffocaverit' 「あらゆる犯罪は同等である。過ちは全て恐るべき罪である。必要もないのに雄鶏を絞め殺すのも、自分の父親を絞め殺すのも、罪は同じだ」(Pro Murena, 29・61)。Hor. がこの文章を見たかどうか判らないが、当時これがストアの理論として知られていたことは明白だ。

15) ここで展開される人類発展史は Epic. 派のもので、Lucr. の詳細な記述(De rerum natura, 5・783ff.)をごく手短かに要約したものと考えられる。

16) ヘレネー(Helene)はトロヤ戦争の直接要因となった美女。アプロディーテーに唆されたトロヤの王子パリスが、スパルタ王妃だった彼女を奪って小アジアへ帰ったことにより、ギリシャ、トロヤ両民族の争いが始まった。Hor. にとって歴史(記録された歴史)はトロヤ戦争と共に始まり、それ以前のことは闇の中にあるということ。

17) この「論理」(ratio)はストア哲学のこと。

18) ストア派たる君は厳しい罰則を持っている。大きな罪に対して小さな罰を加えるといった態度を君からは期待できない。「……心配する必要がない」は、「そのようなことはあり得ない」の意。

19) 「もしも賢者だけが富者であり……」これも周知されたストアのパラドックス。約一世紀前に Luc. も既に知っており、Cic. や Varro がこれをからかっている。参考までに次の Cic. の一文を見ていただきたい。'Fuit enim quidam summo ingenio Vir Zeno cuius inventorum aemuli Stoici nominantur.

派な靴屋であり、ひとり美男子で、王であるとするならば(125)、なぜ君はすでに持っているものを求めるのだろうか。

この男は言う、「あなたは知らないのです、我らが父クリューシッポス<sup>20)</sup>の言われることを。賢者は決して自分のためにサンダルもスリッパも作りませんでした、それでも賢者は靴屋なのです。」

「なんだって？」

「つまり、たとえ黙っていてもヘルモゲネース<sup>21)</sup>はやはり歌手であり、優秀な音楽家であります。また腕達者なアルフェーヌス<sup>22)</sup>にしまし

Huius sententiae sunt et praecepta eius modi : sapientem gratia numquam moveri, numquam cuiusquam delicto ignoscere : neminem misericordem esse nisi stultum et levem : viri non esse neque exorari neque placari : solos sapientes esse si distortissimi sint formosos, si mendicissimi divites, si servitutem serviant reges ; nos autem qui sapientes non sumus fugitivos, exules, hostis, insanos denique esse dicunt.」[かつてゼノンという天才がいた。彼の信奉者たちはストア派と呼ばれる。彼の教義と倫理規範は次の如きものである。＜賢人は〔他者からの〕好意に心を動かさず、過誤を見逃がすことは決してない。〔他者に〕同情するのは愚者が軽薄人だけである。人間の名に値する人間は動かされもしないし屈服させられもしない。賢人だけが、たとえ人間の中で一番醜くとも、美しいのである。いかに貧しくとも、豊かである。たとえ隷属の身であっても、賢人は王である。＞賢人ではない我々はどうかといえば、〔ストア派から見れば〕我々は逃亡奴隷であり、亡命者であり、夷狄であり、そして結局は気違いなのだ〕(Pro Murena, 29・61)。

これは Cic. がストア派に見られる非常識的で非人間的な側面を示すために、この学派の最も厳格な教義の中のいくつかを列挙したもの。Hor. は富と美の中間に Cic. の文章にはない「靴屋」を挿入しているが、これは勿論滑稽味を強調するのが主たる狙いである。しかし靴屋(σικετός)は、ストア理論史(特にエピクテートの論文)において大工(τέκτων)と共に永遠不変の手職の代表であり、この伝統はクリューシッポスまで遡るらしいので、ここで Hor. は多くの職業の中からでたために靴屋を選んだわけではない。

この一節の終りの、君が「既に持っているもの」は王国のこと。君は自分で賢者であると言うからには、既に君は王でもある。つまり定義によって王である。

- 20) ストア派の創建者はゼーノーン(ca. 335-ca. 264)であるから、「父クリューシッポス」(pater Chrysippus)は尊称である。彼は前232年に三代目学頭となった。Cilicia 出身の人で、当時大流行していた Epic. を攻撃し、またプラトーン学派をも攻めつつ、ゼーノーンの学理を定着させ、特に倫理学に秀でた。

21) Hermogenes, 注1を見られたい。

22) Alfenus Varus はクレモーナで靴屋をやっていたが、ローマに上って法律を修め、遂には執政官(39年)にまで栄達した。

ても(130)仕事に使う道具を全部うっちゃって、店を閉めた後でも彼はやはり靴屋でした。このようにして賢者はあらゆる技術において最高の職人であり、そして彼だけが王なのです。」

悪童らが君のひげを引き抜く<sup>23)</sup>。そして君が杖で追い払わない限り、君は群がり寄る彼らに圧迫され、惨めにも(135)君は破裂し、そして吠えるのだ、大いなる王たちの中で最大の王よ。

要するに、王たる君が25円払って銭湯に行き、そこであのばかなクリスピーヌス<sup>24)</sup>を除けば君について行く取巻きは一人もいないのに対して、寛大な友人たちは私を許してくれるのだ、賢者でない私がへまを仕出かしても(140)。そのお返しに私は彼らの落度を気前よく許し、そして私人として、私は王たる君よりいっそう幸福に生きるだろう(142)。

## 諷刺詩 1・4

### 諷刺詩がなぜ悪い

エウポリス、クラティーノス、アリストパネースといった詩人たち<sup>1)</sup>も、彼ら以外に古喜劇を書いた人々も、悪人、盗人として、間男あるいは人殺しとして、または何らかの点で悪名高い人間として記述するにふさわしい人物を見つけると、これを大いに自由に書きまくったものだ(5)。

ルーキーリウス<sup>2)</sup>は全体として彼らに依存し

- 23) 「悪童らが……」相手の余りにばかばかしい言葉に、Hor. は呆れて議論する気もなくなる。ここで述べられている哲学者の姿はストア派とキュニコス派のそれで、彼らは当時街角に立って教えを述べた。伸び放題のひげと杖は特にキュニコス派の辻説法者の目印となった。当時のストアの民衆哲学者はキュニコス派に似通っていたので、ここで二つの姿が重なっている。また136行の「吠える」は犬が吠えるというイメージから来ており、キュニコス派(κύων「犬」)にふさわしい述語であるが、上述の如き類似から、ここのストア派論難の文脈で用いられている。

24) Crispinus は Sat. 1・1・120にも登場したストア派の哲学者、詩人。

### Sat. 1・4

1) Eupolis, Cratinus, Aristophanes は古アッティカ喜劇の代表者で、ヘレニズム時代の文芸批評によって三大悲劇詩人に対応するものと見なされた。

2) Gaius Lucilius (ca. 180-102/01), 諷刺詩人。ラティウムの Suessa Aurunca の騎士身分の家に生まれ、

ている。彼はこの人々に追隨した、脚韻の形式を変えただけで。彼は機知に富み、鋭い嗅覚を持っていたが、ごつごつした詩行を組み立てた。ここに彼の欠点があった。しばしば、一刻のうちに、大手柄でも立てるかのように、片足で立って二百行の詩を口述した(10)。

彼は泥川のように流れたが、そこには削除してよいものが沢山あった。

お喋りの上に怠け者で、書く労を、それも正しく書く労を惜しんだ。つまり私は量は問題にしないのである。ほれ見なさい、あのクリスピーヌスが私には端金を賭けさせて挑みかかる<sup>3)</sup>。「君、どうか蠟板を手に取り給え、ぼくもそうするから。場所、時間、証人を(15)決めなさい。私ら二人のうち誰が余計多く書けるか、やってみようではないか。」

神々はよくして下さった。私の魂を弱くて小さくて、滅多に喋らない、それも僅かなことしか喋らないように仕立てて下さったのだから。

しかし君は、もしそうしたければ、山羊皮製の送風器で押し込められ、火が鉄を柔らかくするまで働き続ける(20)空気を真似るがいいさ。

ファンニウスは頼まれもしないのに自分の肖像で飾った本箱<sup>4)</sup>を人に配って、嬉しがっている。

他方、私の作品など誰も読まない。私は自作を人々の前で読むのが恐い。大抵の人間は批判に値し、従って私のこの種の作品を不快視する人は多いからである。群集の中からこれぞと思う人を選んでみなさい(25)。

諷刺詩集 30 巻を作ったが、現存するのは約 600 行の断片のみ。とりわけローマ的な諷刺詩ジャンルの開拓者と仰がれたが、Hor. は技術的な面でこの先輩に批判的である。ローマの貴族階級と親交を結んでいた。

3) Crispinus は多産と速筆の能力を自慢する饒舌なへば詩人の例。Sat. 1・1・120; 1・3・139 に出てくると同じ人物。「私には端金を賭けさせて挑みかかる」という表現は、「小指で合図して勝負を挑む」とも解釈されている (Kiessling—Heinze, Büchner)。我々は *minimo* (14) に *pignore* を補う解釈に従う。

4) Fannius Quadratus は、Sat. 1・10・80 でははっきり「ばかな奴」(*ineptus*) と評されている。自己宣伝が好きで、図々しくも円筒に自分の似姿(顔)を描き、筒の中に自作を巻き入れて配ったものらしい。

欲心に、または不幸のもとになる野心にさいなまれる者がいる。

ある者は人妻との愛に熱中し、ある者は少年愛に狂う。

銀器のきらめきに魅入られる者がいれば、アルビウス<sup>5)</sup> は青銅作品にうつつを抜かす。

ある者は商品を取引きするために、太陽の昇る地方からその太陽で暖められる西方まで移動する。それどころか、この男はまっしぐらに(30)苦難の中を突進する、旋風によって集まる砂塵のように。元金を少しも失いたくない、あるいは財産をふやしたいと考えているのだ。

こういう連中はみな詩を恐れ、詩人らを憎むのである。「あいつは角に干し草をつけている<sup>6)</sup>。遠くへ逃げろ。あの男は自分が笑いさえすれば、自分の友人でさえ一人も容赦しないだろう(35)。そしてあいつは、パピルスに何を書くにしろ、いったん書いたものをパン屋や水汲み場から戻る人々全部に、若い奴隷や老婆たちすべてにそれを知らせようとやっきになるのだ。」よろしい、私の手短かな反論を聞きなさい。

まず私は、私が詩人と認める人々の数の中から私自身を除外しよう。事実、君は、詩行の脚韻を整えれば(40)それで詩人として十分だとは言うまいし、また、私と同様に日常会話に近いものを書く人がいても、君はこれを詩人とは考えまい。

才能ある人、神的な精神を持つ人、そして高邁な事柄を語る人、こういった人々にこの栄えある名前を呈するべきだ。

そういうわけで、喜劇は詩であるのかないのかを(45)せんさくした人々がいる。というのは、精神の昂りや力感喜劇の会話や主題の中にはないし、規則的な脚韻によって会話とは異なるという点を除けば、喜劇は紛れもなく会話であるから。

5) Albius は 109 行に出てくる「アルビウスの息子」の父親かどうか不明。そうだとすれば、父アルビウスがこんな贅沢をしたので息子が苦勞、ということになる。

6) 兇暴な牛はその角に干し草を巻きつけて目印にした、

「しかし火の玉のようになって怒る父親も登場するじゃないか<sup>7)</sup>。狂ったように娼婦に惚れた放蕩息子が、莫大な持参金つきの娘を拒否し(50)、さらに恥の上塗りをするべく、酔いにまかせてまだ夜にならない時刻に松明をかざして街をうろつくからといって。」

あのポンポーニウス<sup>8)</sup>は、もし父親が生きていたら、君が言及している「劇の父親」のに比べてもっと穏やかな科白を聞いただろうか。

だから、平板な言葉で詩の一行——すなわち、いったんその詩行をばらばらにした場合、そこに述べられている父親が、仮面をかぶった劇中の父親と同じ調子で(55)怒っているという結果にしかない詩行——を仕上げるだけでは十分ではない<sup>9)</sup>。

私が現在書き、かつてルーキーリウスが書いたこのようなものから、もし君が音節と脚韻の規則的連続を取り除き、先行していた言葉を後に回し、最後の言葉を先頭に持ってきて、君は——ちょうど「おぞましき不和の女神が、戦さの門と(60)鉄の支柱を押し破りしのち」をばらばらにした場合のように——解体された詩人の四肢<sup>10)</sup>を見出すということにはなるまい。

このことについては以上にとどめよう。別の機会に、これが果たして本当の詩なのか否かをたずね、今はこの種の書き方についての君の疑

惑が正当であるか、ということだけを問おう。

恐るべきスルキウスと(65)カプリウス<sup>11)</sup>が街を歩き回っている。二人はひどい嘆れ声で、証拠を書きつけるノートを持ち、いずれも盗人たちにこの上もなく恐れられている。しかし、正しく清らかに生きる人なら、この二人のどちらをも無視できる。

君がカエリウスやビッリウスといった泥棒に似ていると仮定しても、私はカプリウスでもスルキウスでもありえない。なぜ私を恐れるのだ(70)。

どこかの書店や回廊の柱で私のささやかな本が掲示され、その結果、大衆やティゲッリウス・ヘルモゲネース<sup>12)</sup>の手がこれを汗でよごす、といったことはないだろう。

また私は友人たち——それも無理強いされてのこと——を除けば、誰にも自作を朗読しない。所嫌わず、人々の前で、誰にでもというわけにはいかない。

公共広場の真中で、あるいは浴場で作品を朗読する人々が多い(75)。閉ざされた場所が心地よくその声を反響させるのである。これは、そんな行為が礼儀にかなっているか、時を得ているかを問おうとしない、頭の空疎な人々を喜ばせる。

「あなたは人を傷つけるのが楽しいのだ。それも、意地悪くわざわざそうしている」と言う人がいるかも知れない。一体どうして君はこんな言葉を私に浴びせるのだろうか。それから、これまで私と一緒に生きてきた(80)人々の中に、誰かそのことを保証する者がいるというのか。

その場にいらない友人の陰口を言う者、他人がこの友人を責めても弁護しない者、人々の高笑い、面白い奴だとの評判を得たがる者、見もしないことをでっち上げられる者、内緒話をそっと隠しておけない者、これは腹の黒い人間だ。

7) 「しかし火の玉のように……」は、数行前から喜劇は厳密に言って詩ではないとする Hor. に対してなされる、喜劇も詩なりと主張する人々の反論。「喜劇もたまには崇高な詩になる。だらしのない息子を叱る父親のあの調子の高い科白が何よりの証拠だ」という主張である。

8) Pomponius, 詳細不明。父親の死後すっかり独立自由になった身持ちの悪い青年。これは劇中の放蕩息子に対応しており、実生活の中でその父親が語る言葉は、喜劇の中の父親の科白と同じであろうということ。

9) コメディに使うような詩行を書くだけでは十分ではない、詩人の数に入らない、というのがこの大意。「平板な言葉」は喜劇で使うような日常言語のこと。

10) 「おぞましき……」は Enn., *Annales* の一節。崇高な詩の例として出されたもの。「解体された詩人」の詩人は「詩」のこと。つまり「あたかも Enn. の叙事詩の一部をばらばらにするように、私や Luc. の詩をばらばらにしたところで、そこにあるのは解体された詩の四肢、すなわち立派な詩行を形成していた各語ではない。」Enn. の詩行を散文のように解体した場合、各部分は本来の崇高さをなお維持するのである。

11) 職業的な密告者の例。強盗や人殺しに狙いをつけて法廷へ引き出すのが仕事。

12) Tigellius Hermogenes, *Sat.* 1.3.129 に出てきた歌手。

ローマ人諸君、こんな人間に用心しなさい<sup>13)</sup> (85)。

よく見られることだが、三つの食事用寝台にそれぞれ四人ずつ入って食事をするとき、その中の一人が他の全員に区別なしにけちをつけたがる。その際、水を提供する主人だけは除外されるが、この人も、酒のあとで、つまり真実を語らせる酒が人々の胸の内をさらけ出させる頃には、けちをつけられる<sup>14)</sup>。こんな男が君には愛想よく、粹で、率直に見えるのだ(90)、腹の黒い人々の敵たる君には。

間拔けなルーフィッルスが芳香錠剤を匂わせ、ガルゴーニウス<sup>15)</sup>が山羊くさいからといって、もし私が笑えば、君は私のことを嫉妬深くて意地の悪い人間だと言うのかい。

もし誰かが君の面前でカピトリーヌス・ペティッリウス<sup>16)</sup>の盗みに言及したなら、君はいかにも君らしい仕方で彼を弁護するだろう(95)。

「カピトリーヌスは古くからの私の仲間で、竹馬の友であり、私のためを思って、私の求めに応じて、実に多くのことをしてくれた。そして、彼が無事に都で生きているのが私は嬉しい。しかし私は、どうして彼がああ裁判をくぐり抜けられたのか不思議でならない。」

13) 「その場にいない友人……」からここまでの部分を、Hor. に対する論敵の言葉と解する人々もいるが (Plessis-Lejay, Villeneuve, Morris), 我々はここを、Hor. が「邪まにも人を傷つけて喜ぶ性悪な人間の実例」を示している (Kiessling-Heinze) 部分と考えたい。

14) 「三つの食事用寝台にそれぞれ四人ずつ入って食事をする」のは上流社会のしきたりにはない食事法。普通は各寝台に多くて三人が寝そべった。「水を提供する主人」とは、宴会を始めるとき、客人らに順ぐりに手を洗う水を回すよう奴隷に指図する主人のこと。「酒に真実あり」という考えはギリシャ人と共通（そして人類共通）のもの。“Οἶνος,” ὃ φίλε παῖ λέγεται, “καὶ ἀλάθεια.” 「愛しい子よ、「酒と真実」と言うではないか」(Theocr., 29・1)。

15) Rufillus, Gargonius はいずれも不明の人物。ここは人物名、文句共に Sat. 1・2・27 で使ったもの (pastillos Rufillus olet, Gargonius hircum) をそのまま繰り返している。

16) Petillius Capitolinus. これが実在した人物かどうか判らないが、ローマでは大胆不敵な盗賊を評して、「カピトリウム丘の大神ユーピテルの王冠を盗んだ」と言う習わしがあった。この人物も大泥棒のことと考えてよいだろう。Capitolinus は「カピトリウム丘の」という意味。

これこそ真烏賊の墨であり、これこそ(100)生粋の緑青<sup>17)</sup>というものだ。このような底意地の悪さは、私の書物とは、そして何より私の精神とは全く縁遠いものとなろう。自分のことでもし何か約束できることがあるとすれば、まさに今言ったことを約束しよう。

もしも私の物言いがかなりあけすけで、また軽い調子になっても、これくらいのことは君も私に気前よく認めて欲しい。素晴らしい父がその習慣を私に植えつけてくれたのだが(105)、それは、色々な過ちを実例で教えることによって、私にそういった過ちを避けさせるためだった。

儉約し、質素を心がけ、そして父みずから私のために買ってくれたもので満足して生きることを私に勧める際に、こう言ったものだ、「アルビウスの息子<sup>18)</sup>がどんなひどい暮らしをしているか、パーイウスがどれだけ貧乏しているか判ってるだろう。これは、誰しも遺産を(110)無駄使いしてはいけない、というこの上もない教訓だ。」娼婦とのさもしい交わりを私に禁じたとき、「スケーターヌスの轍を踏んではならない」と諭した。

合法的な恋愛を楽しめるのに、私がよその奥さんたちに言い寄ったりしないように、「現場を見つかったトレポーニウスの評判は芳しくない」とよく言ったものだ。

「哲学者が、何を避け、何を(115)求めるべきか、お前にその理屈を教えるだろう。わしとしては、先祖伝来の習わしを守り、そして、お前が後見人を必要とする間お前の生命と評判を傷つけぬよう守れば、それで十分だ。年月がお前の身体と精神を堅固にしてくれる、その暁にはお前はもうコルクの浮き帯<sup>19)</sup>を使わないでも泳げるだろうよ。」このように語って(120)幼い私を父は教育した。

そして、私に何かをするよう命じるときは、

17) 烏賊の墨は「偽善、陰険」の象徴、緑青は「毒」すなわち「裏切り、憎悪」の印。

18) 注5を見られたい。

19) コルクがしの樹皮で作った帯状のものを身体に巻きつけ、今日の浮袋のようにして使ったもの。

「お前がそれをするについては、立派なお手本があるのだ」と言って、とある特選判事<sup>20)</sup>の名をあげたりした。

ある行動を禁じるときには、「これが恥ずかしい、無益な行為だってことは、疑う余地はないだろう。誰それが悪い評判を立てられて (125) 苦しんでるじゃないか」と言うのだった。

隣人の葬式が不節制な病人らをぞっとさせ、死を恐れて身体をいたわるようにさせるのと同様に、他人の汚辱はしばしば、まだ柔らかい魂を過ちから遠ざけてくれる。

その結果私は、破滅を招く過ちとは全く縁がない。無論欠点もあるが、それはありきたりなもので (130)、大目に見てもらえるはずだ<sup>21)</sup>。そして、恐らくそんな欠点の多くを運び去ってくれるだろう、長い年月が、率直な友人が、あるいは私自身の省察が。実際、私は寝台で休息したり、回廊を散策するときでも、自分のなすべきことを忘れない。

「こっちの方が正しい。」「こうすれば俺の生き方はもっと良くなるはずだ。」「このようにして私は友人たちに (135) 好かれるだろう。」「あの人の振舞いは良くないなあ。俺もいつかは、うかうかあのと同じことをやるんだろうか。」

こういったことを私は唇を閉ざして考えめぐらす。自由な時間があるときに、これを紙に書きつけて楽しむ。これは、さっき述べた平凡な欠点の一つだ。もし君がこれを許してくれないなら (140)、詩人の大群が押し寄せて、私を助けて欲しいものだ。なにしろ私たち詩人はさぶる数が多く、ちょうどユダヤ人がやっているように、私たちは、この群に仲間入りするよう君にしつこく迫るだろう<sup>22)</sup> (143)。

20) 特選判事 (iudices selecti) は毎年、刑事訴訟を扱う裁判官団を構成するため法務官が判事名簿 (album iudicum) に記入する著名な人々のこと (元老院議員や騎士など)。

21) Hor. が「自分にはささやかな欠点しかない」と主張する例は Sat. 1・3・20 にもある。

22) ユダヤ人 (Iudaei). 共和政末期のローマにはユダヤ人が多かった。彼らの緊密な連帯意識、命令への忠誠ぶりはよく知られていた (Cic., Pro Flacco, 66). Hor. は、ここでユダヤ人の改宗勧誘運動のことを示唆してい

## 諷刺詩 1・5

### ブルンディシウム旅日記

大いなるローマを出発した私を<sup>1)</sup>、アリーキアが小さな宿屋に受け入れてくれた。道連れは弁論術教師ヘーリオドーロス<sup>2)</sup>で、これはギリシャ人の中でも図抜けた学者である。そこからフォルム・アッピー<sup>3)</sup>に行ったが、ここは船頭やけちくさい宿屋の亭主などが沢山いる。

この道のりを怠惰な私たちは二日に分けた。私たちより身軽な人々なら (5) 一日で済ませる距離である。ゆっくり行けばアッピア街道<sup>4)</sup>は辛い道ではない。ここで私は水——これは最悪だった——のせいで、腹に宣戦布告し、心おだやかならぬままに仲間が食事するのを待たねば

る。当時は詩人も多かった。内戦末期に増え、アクティウム戦 (前 31 年) 後さらに増大。Hor. は皮肉を込めて語っている。本当に詩人と言えるのは、彼の近くにいる若干の人々にすぎないとの考えが底流しているものと思われる。

#### Sat. 1・5

1) これは前 37 年春 Hor. が実際に行なった旅行を文章化した作品。但し彼自身の旅ではなく、政治的な用向きでブルンディシウムへ下る Maec. に同行したものである。ここで、宿泊あるいは通過した場所とおよそのキロメートル数を一括して記しておきたい。主に Villeneuve や Kiessling-Heinze の説明を参考にした。( ) 内のキロメートル数は直前の場所からのもので、1 マイルを約 1,480 メートルで計算した。ローマからブルンディシウムまで約 535.7 キロメートルである。

ローマ (Roma)——(1)アリーキア Aricia (23.7, 泊)——(2)フォルム・アッピー Forum Appi (39.9, 泊)——(3)運河 (泊), フェーローニア Feronia の苑, アンクスル Anxur (28.1, 泊)——(4)フンディー Fundi, フォルミアエ Formiae (38.5, 泊)——(5)シヌエッサ Sinuessa, ポンス・カンパヌス Pons Campanus (39.9, 泊)——(6)カプア Capua (25.2, 泊)——(7)カウディウム Caudium (31.1, 泊)——(8)ベネウェントゥム Beneventum (16.3, 泊)——(9)トリウィークム Trivicum (37, 泊)——(10)名称不明の町 (Asculum Apulum か? 35.5, 泊)——(11)カヌシウム Canusium (51.8, 泊)——(12)ルビー Rubi (34, 泊)——(13)バーリウム Barium (34, 泊)——(14)グナーティア Gnatia (54.8, 泊)——(15)ブルンディシウム Brundisium (45.9, 終点)。

2) Heliodorus. 昔から二人のギリシャ人が推測されているが、どちらなのか不明。

3) ポンプティーナエ沼沢地 (Pomptinae Paludes) を横切り、フェーローニア神殿で終る運河の起点となる町。この運河のおかげで人々は寝たまま旅を続けられた。

4) Appia [via]. ローマと地方をつなぐ幹線道路の一つ。前 312 年執政官 Appius Claudius Caecus がローマとカプアを結ぶために作った。後にベネウェントゥム、ウェヌシア、タレントゥムを経てブルンディシウムまで伸びた。

ならなかった。

もはや夜が地上に影をもたらし、天空に星々をまき散らしはじめた<sup>5)</sup>(10)。そこで奴隷たちは船頭らを、船頭らは奴隷たちをのしった。「船をこっちへ押してくれよ」、「三百人もすし詰めにしやがった」、「待て待て、もう十分だぜ。」

船賃を払い、驃馬をつないだりするうちに、まるまる一刻が過ぎ去る。邪悪な蚊どもと沼の蛙たちが眠りを妨げる<sup>6)</sup>。

傍にいない恋人を歌にのせて、酔のような(15)葡萄酒をしこたま飲んだ船頭と旅人<sup>7)</sup>が喉を競ったが、最後は旅人がくたびれて眠りはじめ、怠け者の船頭は驃馬を放して草を食わせ、その手綱を岩に結び、自分は仰向けに寝て大鼾だ。

もう間もなく次の日になるという時分、私たちに船の動きが一寸たりとも(20)感じられなかった。そこで短気者が一人飛び下り、驃馬と船頭の頭と腰を柳の棒でひっぱたいた。私たちがなんとか上陸したのは漸く第四時頃<sup>8)</sup>のことである。そして顔や手を、フェーローニア様、あなたの水で洗いました。

それから、食事を済ませたあとゆっくり三マイル進み、そして(25)遠目にも白く輝く岩山に乗ったアンクスル<sup>9)</sup>に到着した。

この地へあの素晴らしいマエケーナースとコッケイウスが来る手筈になっていた。兩人とも

重大な要件で派遣された使節で、仲違いした友人たちを取りなすことに長じていた<sup>10)</sup>。

ここで私は目脂に悩まされ、目に黒い薬を(30)塗った。とかくするうちにマエケーナースとコッケイウスがやって来た。フォンテーウス・カピトーも一緒だったが、これは一分の隙もない紳士で、アントーニウスの腹心の友である。

アウフィディウス・ルスクスが法務官として治めるフンディー<sup>11)</sup>を私たちは喜々として立ち去った。そのさい私たちは、この旧書記官が身につけたバッジの数々(35)、緋の帯飾りのある長衣、〔トゥニカに付けた〕広幅の帯飾り、真赤な炭火を運ぶ十能などを大笑いした。

次に、くたびれた私たちはマームッラー族の町<sup>12)</sup>に泊った。ここではムーレーナが家を、カピトーが食事を提供してくれた。

次の日が始まったが、これは最高に嬉しい一日だった。というのは、シヌエッサで、プローティウス、ウァリウスそしてウェルギリウスが

10) コッケイウスは L. Cocceius Nerva のことと思われる。前 39 年に代理執政官を務めた法律家。「仲違いした友人たち」(aversi amici) とは Oct. と Ant. のこと。前 40 年両陣営間に プルンディシウム協定が成立したが、これは、Oct. の代理人たる Maec., Ant. の代理人たる Asinius Pollio, そして両側共通の友人 Cocceius の三人によって締結された。「……取りなすことに長じていた」は以上の事情を指している。Hor. は明言してはいないが、今度の Maec. の旅行もやはりぎくしゃくしている両陣営の関係を調整するため Ant. と会見することを目的としたものらしい。途中から Ant. 派の Fonteius Capito (前 33 年代理執政官、アジアにおける Ant. の代官) が道中に加わるのはそのためである。

11) 法務官 (praetor) はローマでは執政官 (consul) に次ぐ要職。フンディーという田舎町の町長が果たして実際に praetor と呼称されていたのか、又は詩人がかかっているのか明白でないが、後者の可能性が大きいように思う。しかしこのからかい方は町長の立場からすれば不当だ。彼が迎えてもてなしているのは中央政府の大臣たちと言って差し支えない身分の人々であり、彼が綺麗を飾るのはむしろ当然であろう。十能 (vatillum) はこのような重要な折に欠かせない犠牲式で使うか、もしくは香を焚くのに使うかしたものらしい。

12) Mamurra を名乗るのはフォルミアエ (Formiae) 出身の人々だったので、これはフォルミアエのこと。海岸沿いの町で当時有名な別荘地。ムーレーナは後に Maec. の義兄弟となった L. Licinius Murena のことで、彼もここに別荘を構えており、ここで一行は泊った。この人物は前 22 年 Aug. に対する陰謀が発覚して刑死した。

5) 叙事詩体のパロディ。

6) 驃馬は川沿いの道を歩んでロープで船を曳いたもの。蚊、蛙という記述からこの旅のなされた季節は春だったと考えられる。

7) 船頭 (nauta) は船上にいる。旅人と訳したところは、(1)船客、(2)路上で驃馬を追う御者、(3)陸上旅行者の三つの解釈が考えられるが、(1)船客が最も自然である。この船客が眠ったあとで、歌合戦に勝った船頭は船から飛び下りて驃馬をつなぎ、自分も横になる。

8) 季節を春とすれば、これは今日の午前 9-10 時頃。次のフェーローニアはイタリアの古神格で、泉や森の女神。この神聖な泉の近くが運河の終点で、ここで旅人が手や顔を洗うのは、疲れを癒してさっぱりするためであろうが、むしろこの女神への表敬行為だったと考えられる。

9) Anxur はウォルスキー方言による名称で、普通は Tarracina と呼ばれた町。白い石灰岩質の丘の上にあった。



(40)やって来たからだ<sup>13)</sup>。彼らはこの世にかつてなかったほどの純白の魂の持主で、また私はど彼らを大事に思う人間もいるまい。私たちは抱き合って再会を祝したが、その嬉しかったこと！ 正常である限り、私は、友情の楽しさに比べられるものなど思い付かないだろう。

ポンス・カンパーヌスに近い小山荘が屋根を(45)、接待係の役人たちが規定の薪や塩を提供した。そこからカプアへ向かい、ここで驟馬の荷鞍はちょうど良い頃合に下ろされた。マエケーナースは遊びに行き、私とウェルギリウスは眠った。眼病みと消化不良の人間にとって球戯はよくないので。

ここを発ったあと、私たちをコッケイウスの贅を尽した別荘が迎えてくれた(50)。その別荘はカウディウムの旅館街の上方にある。

さて、私めに、手短かに、幫間サルメントゥスとメッシウス・キキルスとの争いをどうか語って下さい、詩女神よ、そして相争った二人がどんな父親の子だったかを<sup>14)</sup>。

メッシウスの輝かしい一族はオスク系である。サルメントゥスはといえば、彼のかつての女主人は健在だ。こんな祖先を持つ二人が(55)丁々発止の争いを始めた。まずサルメントゥスが「あなたは野生の馬<sup>15)</sup>そっくりですな」と言う

13) Plotius Tucce と L. Varius Rufus は、Verg. 没後その遺作となった大叙事詩 *Aeneis* を Aug. の命令で編集、出版した。Varius と Verg. は Hor. を Maec. に紹介してくれた大切な友人 (*Sat.* 1.6.55)。感謝の念が不断にあるため、この二人への友情表現が熱狂的な様相を帯びている。Varius は叙事詩や悲劇の作家として当時非常に高く評価されていた。

14) ここからあとは、晩餐の食卓を賑しくするために道化師や漫才師などを同席させた上流社会の習慣がうかがえる。ここは Sarmentus と Messius Cicirrus の傾智競争のようなもの。

Sarm. は以前 M. Favonius の奴隷だったが、この旧主人の財産の一部と共に Maec. の手に移り、後者によって解放された。この出来事のあった頃旧主人の妻がまだ存命していたことが文面から知られる。「幫間」と訳した *scurra* (52) は、ある程度洗練された冗談の言える芸人のこと。

他方 Cicir. は地元の人間（ローマ人がひどく軽んじたオスク人）で、お歴々をもてなす座興のため、都会育ちの Sarm. の対戦相手として狩り出されたもの。

「……語って下さい、詩女神の……」は英雄叙事詩の歌い出し部分の物まね。

15) 「野生の馬」は *equi feri* を直訳しただけのことで、実際は一角獣のイメージが語られているらしい。Cicir. の傷跡を角に見たてたもの。

ので、私たちはどっと笑った。

今度はメッシウスが「左様、そのとおり」と応じて頭をゆすった。サルメントゥスは「やれやれ、もしあなたの額から角が切り取られてなかったら、あなたは何をしたか知れやしない。こんなかたわらになっていてさえ、そういう風に脅しをかけるのだから。」

実際メッシウス・キキルスには醜い(60)傷跡があり、これが左顔面の毛むくじゃらな額を見苦しいものにしていた。サルメントゥスはカンパーニア病<sup>16)</sup>について、顔について散々嘲笑を浴びせ、羊飼いきゅクロプスの踊りを踊るよう求めた、彼「キキルス」には亡霊の仮面も悲劇の高靴も要るまい<sup>17)</sup>と言いながら。

これに対してキキルスは猛反撃した。彼は相手に、既に鎖を(65)守護霊たちに捧げて誓約を果たしたかと尋ねた<sup>18)</sup>。サルメントゥスは今は書記であっても、かつての女主人の権利が減ることはないのだ。

最後にキキルスは尋ねた、なぜかつて逃亡したのか、小麦粉の一ポンドもあれば、そんなにやせっぽちでチビな彼には十分だったのではないか<sup>19)</sup>、と。

16) どんな病気だったのか不明。カンパーニア地方特有の風土病か。いずれにしろ顔に傷跡を残す原因となったものであろう。

17) キュクロプスの踊りは、舞踊かパントマイムによるサテュロス劇（一種の狂言劇）で使われた滑稽なダンスだったらしい。仮面も高靴も要らないというのは、Cicir. がひどく背が高く、顔も陰惨な仮面が要らないほど十分に陰惨であるとのこと。

18) 鎖は奴隷身分の象徴。この文章は、剣闘士が引退するとき愛用の武器を神々に捧げた習慣をヒントにしているらしいが、ここでは Sarm. が、「もし自由身分になればこの鎖を皆様に捧げます」との誓いを守護霊に立てた、ということ。Cicir. が想定したものと考えられる。そのあげく今 Cicir. は Sarm. に、今や自由になったのだから例の誓約をちゃんと果たしたのか、と訊ねる。相手の昔の身分を殊更に話題にする嫌味な質問。「かつての女主人の権利が減ることはない」という言葉の意味は次の「なぜかつて逃亡したのか」という表現から明らかになる。Cicir. は今度は Sarm. が逃亡奴隷であると想定して話を進める。元の主人は、逃げた奴隷を見つけ次第いつでも家へ連れ戻す権利を保有している。

19) たとえば大カトーの奴隷たちは、毎日、秋と冬は四ポンド、春と夏は五ポンドのパンを当てがわれた (*De agri cultura*, 56)。従ってここは、一ポンドのパンで足りるちび男だから、空腹の余り逃亡する必要はなかったらうとの皮肉。先に身体的弱点を云々されたのでそのお返し。

私たちはすっかりワクワクしてこの夕食にたっぷり時間をかけたものだ(70)。

そこからまっすぐベネウェントゥムに向かった。ここでは熱意あふれる主人が貧弱な鵜をぐるぐる回して火であぶってるうちに、危うく火事になるところだった。というのは、古い台所に火が飛び散り、燃えさかる炎が天井をなめんばかりの勢いを見せたからである。そのとき、腹ぺこの客たちと、恐怖にわななく召使いたち<sup>20)</sup>が御馳走を(75)つかみ取り、さらに全員で消火しようとした有様は、みものだった。

そこを離れると、アプーリアの地<sup>21)</sup>が、私にとって懐かしい山々を見せはじめた。吹きつる熱風がこの山々を乾燥させる。私たちはここを難儀して這い登りはしなかっただろう、もしトリウィークム近辺の山荘が私たちを収容してくれなかったなら。

ここでは煙に見舞われて涙を流した(80)。葉っぱの付いた濡れ枝が、かまどで燃されていたのである。ばかな話だがここで私は嘘つきの若い娘を真夜中まで待ったものだ。だが睡魔が欲望<sup>22)</sup>に誘われて腹らんだ私を奪い去った。そして悩ましい夢のあれこれが、仰向けに寝た私の夜着とからだを汚してしまった(85)。

そこから私たちは四輪の乗物で二四マイル運ばれた。とある小さな町に宿をする予定だった。この町の名は、詩行の中ではうまく言えない<sup>22)</sup>が、その特徴によって表示するのはしごくたやすい。そこでは物の中でいちばん値の低い水が売り物になる。その反面パンは極上で、抜け目ない旅行者はいつもこれを肩に担いで旅を続けるほどだ(90)。それというのもカヌシウムのパンが石みたいに固いからだ、さて、一壺ぶん

20) 失敗の責めを負わされて主人に罰せられることへの恐れ。

21) Apulia はアペニン山脈を越えてアドリア海に面した地方。詩人の故郷 Venusia はこの近く。一同はベネウェントゥムでアッピア街道を離れて別の道に入り、アプーリアの山々を越えてバーリウムに達し、ここからアドリア海沿岸を南下する。

22) つまりうまく六脚韻(ヘクサメトロス)に合わない名称を持つ町。Equus Tuticus, Asculum Apulum, Herdonea などが考えられるが、決定的解答はない。

余計に水が豊富ということもないこの土地は、昔、勇者ディオメデースによって建設された<sup>23)</sup>。

ここでうち沈むウァリウスが、涙にむせぶ友人たちに暇を告げた。

そこから私たちはルビーに着いた。疲れてしまったが、それは、長い道を、しかも雨でぐしゃぐしゃになった道を進んだためである(95)。翌日は天気は上々だったものの、魚の多いバーリウムの城壁までの道は悪かった。

次に、怒れる水の精たちによって建造されたグナーティア<sup>24)</sup>が笑いとしみを提供した。というのは、この町の人々は、神殿の敷居で火を用いずに香を液化できることを、しきりに納得させようとするので。ユダヤ人アペッラ<sup>25)</sup>なら信じようが(100)、私はノンだ。なぜかという、私は、神々が無憂の時を過すこと、そして、もし自然が何か奇蹟を行なうとしても、それは神々が苛々して天空いや高い宮居から落とすのではない、と学んだから<sup>26)</sup>。

ブルンディシウムがこの長い作品と長い旅の終点である(104)。

23) 旅の終点が近づくにつれ、記述のテンポも速まったことが、この文章のぎごちなさからうかがえる。カヌシウムのパンはじゃりじゃりすること、この町は水が乏しいこと、そしてここはトロヤ戦争の英雄ディオメデースによって建設されたこと、以上三つの相異なる言表を性急に一つの文章にまとめた結果のぎごちなさである。

24) この表現は曖昧であるが、我々は Palmer, Kiessling-Heinze, Morris らと共に次のように考えたい。グナーティアは水のニンフラが腹立ちまぎれに建設した。立腹の理由は水の欠如である。しかし実際はここは水豊かなので、この理由づけは詩人の勘違いによるものである。

25) Iudaeus Apella. Apella という名前は奴隷に多かった。

26) Epic. や Lucr. から学んだこと。Hor. はここで Lucr. の 'nam bene qui didicere deos securum agere aevom' 「というのは、神々が無憂の時を過すことをしっかり学んだ人々は」(5・82)を殆どそのまま借用している。